座談会-「蒋介石秘録」を語る　産経新聞-1976.01.04

『蒋介石秘録』を語る

座談会

若者に読ませたい

本紙連載中の「蒋介石秘録」は、スタート以来三年目を迎え、舞台はいよいよ「満州事変」に移る。満州の広野に起こった戦火は、さらに油をそそいだように日中戦争から第二次世界大戦へと拡大、日中両民族の間には、決定的に不幸な時期が訪れる。そこで満州事変にはいる前に、外交、中国問題の専門家に「蒋介石秘録」を通して、これまでの歴史的経過のなかで日本人として考えなければならない問題や、反省点を話し合ってもらった。（文中敬称略）

勉強になった

――まず、蒋秘録をお読みになってのご感想から。

加瀬　私どもにとって、中国とか台湾とかは身近な国なんですが、とかく毎日のできごとに目を奪われて、つい十年、二十年昔のことは忘れがちなんですね。断片的に思い出すことはあるが、総合的な形で回顧して、なんらかの教訓を得るという機会が少ない。

そういう意味で、この蒋秘録を読んで「なるほど、こういうことがあったんだな」「このかかわり合いは、こうだったのか」ということを改めて思い起こす。自分の知らなかったこともかなりあり、たいへん勉強になっております。

加瀬　俊一氏

石川　中国の現代史をやっている人間として、注文はいくつかあるが、非常によく書けていると思う。蒋介石を囲む大きな歴史的な背景などは、わかりやすく書かれている。ただ、欲をいえば蒋介石に対する言及部分がもう少しほしい。たとえば、その時期の考え方とか行動とかいうものが、くっきり浮かぶような書き方ができないものだろうか、という気がするんです。もちろん、これから蒋介石がさらに前面に出てくるので、そうなるのでしょうが…。

もう一つは、いろいろな事件と事件との関係、何が起こったということは、くわしく書かれているが、その解釈ですね。たとえば、軍閥割拠の部分でいえば、いったいなぜ軍閥が生まれ、なぜ互いに殺し合い、戦いをするのかということ。それは中国の一段深いところの社会構造に問題があるわけですね。

とにかく、私は全体としては満足しているので、いわば、ないものねだりしているようなものですが。

逆行した日本

法眼　私はある面では知らんこともたくさんあったけれども、これを読んでいちばん感じることは、時代のすう勢にまき込まれての行動だと思うが、やはり当時、日本のやったことは相当なことであり、これはたいへんに独断的な行動ではなかったか、ということを強く反省させられるわけです。

むろん先方（中国）にも行きすぎはあったと思うが、しかし、日本がはっきりと見誤っていたのは、長い歴史の中で中国の民族意識が非常にぼっ興してきていたことにたいする見落としというか、日本の政治をしておった人たちが旧態依然たる軍閥などに目を奪われて、あるときはそういう勢力に便乗し、あるときは反対し、当時の日本の国益なるものを伸長しようとはかった。しかし、それはほんとうの国益ではなかったわけです。

現在のわれわれの感覚からみると、どうもアジアの歴史において、日本の果たした役割は逆行しておったわけですね。

中嶋　私は世代的には蒋秘録の舞台になっている事件が展開されているころは、まだ生まれていなかったので（笑い）、中国のことをやっている私としては、非常に勉強になるんですが、現在の日本の若い人は、まさに毛沢東の時代だけをみて中国を考えている人たちが多いわけです。そういう意味では、私は蒋秘録を若者にぜひ読んでもらいたいという気がするんです。この半世紀ぐらいの間は、われわれの同時代史であるはずですが、そういう同時代史というものの恐るべき断絶というものに、しばしば当面しているわれわれ、とくに大学の教壇などに立ってみると、そのことを痛感するわけです。

日本国内には、いわば善玉、悪玉的な見方が非常に強かったんで、オール　オア　ナッシングで否定することしか知らなかったということが、とくに若い世代に多かったわけですね。アジア、中国のナショナリズムの大きな流れの中で、総体的に蒋介石を位置づけるべきだという気がします。

武力背に日本外交

禍根残した対華二十一ヵ条要求

明治憲法誤る

――満州事変以降、本格的に日本自体のことが多くなってくると思いますが、これまでの舞台の中でも、明治以降の歩みのなかで日中間にいくつかの問題や事件が起きています。そのへんを専門家の目で、ご覧になってのお話を。

石川　これまでの連載のなかで、動きとして非常に興味があるのは、辛亥革命にたいする日本外交の対応ですね。それから日本と袁世凱の関係、対華二十一カ条要求でしょう。袁世凱の帝制運動にたいする日本外交は、パワーポリティックス（力の政策）そのもののような感じがする。もう一つは段祺瑞との西原借款であり、さらにもっとあとになるが幣原外交も興味ある問題ですね。

加瀬　日本は清国と戦い、ロシアと戦って勝って、それから大陸発展に着手するんですが、対華二十一カ条問題やシベリア出兵のように、ほんとに無謀な武力政策をしているけれども、日本だけが悪いというのではなく、日本がおかれた国際環境も考えて判断しなければいけないわけですね。

しかし、私は蒋秘録を読みながら感じたのは、そういう二十一カ条とか、シベリア出兵とか、それにつづく満州事変から日中戦争、太平洋戦争とつながっていく過程をみると、結局、明治憲法の運用をまちがっておったと思うんです。あの憲法をつくった人は、ああいう事態が起こることを想定してつくったのではもちろんない。むしろ起こるまいと思ってつくっている。たとえば天皇の地位を考えても、天皇は内心おもしろくないと思われても、それを言葉に出してはいえないというような慣習法的な憲法運用があったんですね。

だから憲法というものは、どんないいものがあっても、どのような欠点があっても、運用する指導者によって生きもするし、死にもするわけです。明治憲法が破たんしたのは、明治維新のころからしばらくの間、集団指導を中心にしていたころはともかく、その後、日本が大国になって戦勝に酔い、大陸発展をした。つまり膨張政策になった。それを悪いということを知っている人も、なおかつ、それを止めることができなかった。結果的には軍部の暴走になった。軍部だけが悪いというんじゃなく、国民に力がないというか、指導者に力量がなかったということです。

合理主義退く

法眼　晋作氏

法眼　日本だけがパワーポリティックスではなく、当時の列強がみなそうであったと思うんです。しかし、日本のやり方は後発のパワーポリティックスで、だんだん時代が変わってきているんだけれども、後発であるがゆえに、より形がどぎつく出ているということではないかと思う。

二十一カ条の問題についても、日本の中でたいへん批判する勢力があったということを強調したい。原敬（元首相）ですが、原敬という人はたいへん合理的な外交面を持った人で、反対していた。あれを実行した人は日置（益）駐華公使ですが、この人は書いたものからみると、たいへん強硬な人ですね。列強もたしかに悪いことをやっているが、日本は追いつくことに急すぎて、そのことが禍根を残していると思う。

人を比較するのはどうかと思うが、幣原（喜重郎元外相、首相）はまったく冷徹な合理主義外交であって、たとえば日本と中国との経済関係の強化を考え、中国でぼうはいとして起こってくるナショナリズムにたいしても非常に寛容であり、深い理解を持っておった。そういう態度で、日本の権益を守るということでは実に強固だったですね。そういう合理主義外交は排斥されて"軟弱外交"ということでだんだんやられていく。そこへ田中（義一）首相兼外相が出てくる。

"終生の恨事"

加瀬　対華二十一カ条要求のときの日置という人は北京に行く前に七、八年、チリにいた人なんです。最初はみんなビックリした。いちばんビックリしたのは中国で、なにか小物をよこしたなという印象を持ったんですね。ナンバー2が小幡酉吉（当時一等書記官）という、のちに貴族院議員に

西原借款のナゾ

中嶋　みなさんがおっしゃったように、日本の政治の問題、まさにその通りなんですけれども、同時に日本人自身のある種の大陸へのロマンと使命感をいざなうほど、中国のなかが複雑であったということもありますね。ですから、日本のなかのある種のロマンチスト、たとえば石原莞爾（元陸軍中将）や、蒋秘録に出てくる川島芳子父子（満蒙独立運動の首謀者）などは、結果的に軍部に引きずられたかもしれませんが、ある意味での善意の一体感みたいなものがあったはずなんです。そのへんを同時に見ていくことも大事じゃないかという気がしますね。

石川　忠雄氏

石川　二十一カ条要求というのは、列強が世界大戦（第一次）に入ってしまって中国をかえりみるいとまがない、まさにその時期を期して日本が中国に押しつけた要求ということができる。もちろん、袁世凱にしても日本の協力というものはある意味では欲しかったこともあったんですけれども。そのあと、日本は寺内（正毅）内閣ですが、膨大な西原借款をやってますね。日本は段祺瑞を援助することによって、段祺瑞の主戦論というか武力統一論で中国を統一させたいというふうなことがあったと思うんです。

しかし、ちょっとあの当時の状況をわれわれが見ると、結果論になりますが、とても段祺瑞の主戦論では統一できるという状況にはなかったんですね。それにあれだけ膨大な、一億四、五千万だったと思いますが、借款をやった寺内内閣の意図というか、判断というのは、現実主義的な判断じゃないような気がするんですがね。

法眼　よく知りませんが、もし私が想像するように外務省の事務当局を無視してやられたということがあれば、非常に具体的に毎日毎日を見て政策を決めておるものにたいして、外で考え出したことというのは、つねに危険がともなう。

石川　西原借款の場合は、案外外務省を飛び越えているんじゃないかと思うんです。

加瀬　西原借款というと、われわれは伏魔殿的な印象を持っていますからね。おそらく現地でなにか話があって、いわゆる政府の首脳と直結して話が闇に入ってやったものでしょうね。

中国は一なり

――蒋介石個人は日本に好意を持っていたようで、日本を第二の故郷とまでいっていますが、日中関係のなかでの蒋介石を、どのように見ていらっしゃいますか。

加瀬　カイロ会談（一九四三年）のとき、ルーズベルトは天皇制はいらないと思っていたんですね。それを蒋介石が主張したので、日本の国民に決めさせようじゃないかということになったでしょう。私どもが非常に苦労した問題ですね。もう一つ、日本が降伏するときに例の"怨みに報いるに徳をもってする"――。クリスチャンだということは知っていましたけれども、あれだけむごい戦争をして、中国側からいえば大きな被害を受けたわけですが、それを毅然としてああいうことがいえるということは、やっぱり指導者ですね。なかなかいえないもんだろうと思いますよ、彼の立場では。

法眼　たしかにえらい人だと思いますね。そのえらさゆえに日本はまた困ったんですよ。私の扱った問題に関係して蒋介石がえらいと思うことは、中国は一つなり、と最後まで主張されたことですよ。えらかったと思います。これは北京政府も認めているわけです、周恩来も。蒋介石が、オレはこの島（台湾）だけでいいと六〇年代にいっていたとすれば、二つの中国ができてますわね。偉大だが、しかしながら日本を含めてはかの国を非常に当惑させたということですよ。

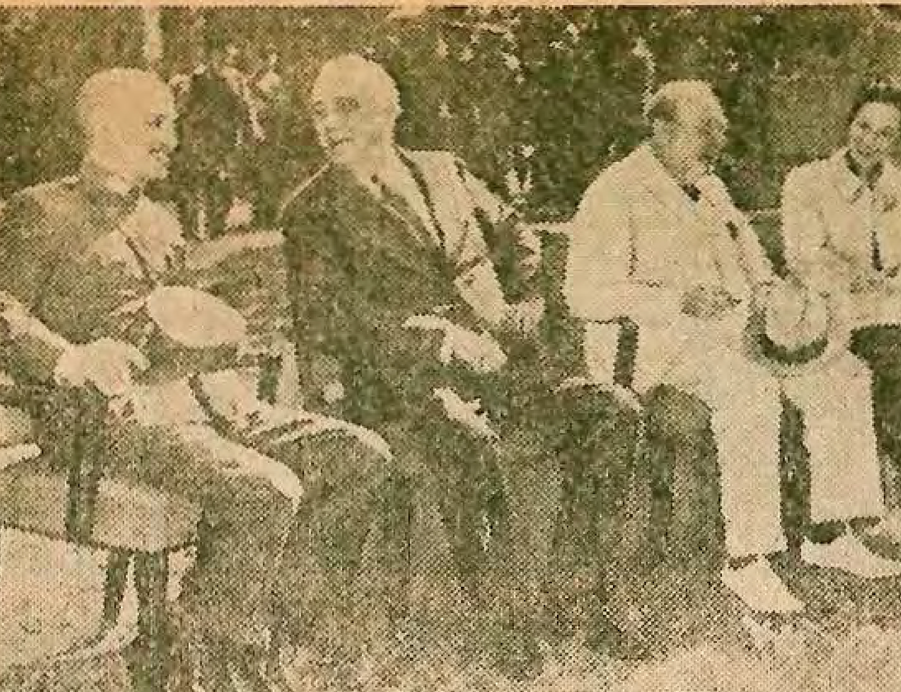
中国を知らぬ米国

「以徳報怨」やはり偉大だった

中嶋　日中関係史のなかでの蒋介石イメージということで考えてみると、日本で蒋介石がいいイメージで一般に伝えられた時期はほとんどないんじゃないですか。もちろん蒋介石の功績を高く評価する意見はかならずあるわけですが、ずっと歴史をさかのぼってみると、日本にとってはむしろ張作霖であり、汪兆銘であり、そして第二次大戦後は毛沢東になっちゃうわけですよね。

私なんか、こどものころから"鬼畜米英"で、ルーズベルトやチャーチルなんかといっしょに蒋介石の顔を踏みつけさせられたも

中嶋　嶺雄氏



天皇制問題が論議されたカイロ会談のときの蒋介石（左端）と（右へ）ルーズベルト、チャーチル、宋美齢

「蒋介石秘録」を語る（左から）加瀬、石川、法眼、中嶋の各氏

出席者（発言順）

外交評論家　加瀬　俊一氏

慶応義塾大学教授　石川　忠雄氏

国際協力事業団総裁　法眼　晋作氏

東京外国語大学助教授　中嶋　嶺雄氏

司会・東京本社編集局長　青木　彰

これまでのあらすじ

日本と中国のかかわり合いの歴史は、世界の歴史に大きな影響を与えてきた。本紙連載の「蒋介石秘録」は、蒋介石の日記、記述、中華民国政府公式文書など、初公開資料にもとづいて、日中八十年の秘史を回顧しつつ、すでに三六三回の連載を終え、いよいよ満州事変へとはいる。

蒋介石は、明治二十年（一八八七年）、浙江省奉化に生まれた。当時の中国は、ヨーロッパ列強の植民地政策のマトとされ、国民は腐敗した清廷の内政のもとに苦しんでいた。蒋介石の少年時代におきた日清、日露の戦争、義和団事件など、中国がこうむった屈辱の数々は、そのまま彼の革命への"原体験"となるものであった。

革命運動に身を投じた蒋介石は、日本に留学、陸軍第十三師団野砲兵第十九連隊（高田）に入隊して軍事を学んだ。日本への留学で彼が学んだものはきわめて多く、彼はのちに「日本は第二の故郷である」とまでいっている。

辛亥革命（一九一一年）の報を聞いて帰国、杭州に初陣を飾った。孫文の指導のもとに、国民革命は成功し、三民主義（民族、民権、民生）を国是とする中華民国が誕生した。しかし、真の独立を達成するためには、三つの大敵を残していた。それは、国内に割拠する軍閥、コミンテルンに指導される中国共産党、いぜんとして領土的野心を燃やす列強、とくに日本軍閥の三つである。

中国の風土に根をおろした軍閥は、私利をはかって離合集散し、きのう味方についたかと思うと、あすは敵にまわって、国民革命を妨げようとした。武力による国内平定のために、蒋介石は、黄埔軍官学校（広州）をおこして、革命軍を養成、二度の北伐の末、一九二八年、ようやく中国の統一に成功、国民政府主席となった。

このころ、共産党も勢力を拡大していた。国民党は一度は合作をこころみるが、合作とは共産党による国民党乗っ取りの陰謀であることに気づく。蒋介石は上海クーデター（一九二七年）をもって、共産党との絶縁を宣言し、統一後も共産軍の掃討に力をそそぐ。これにたいし共産党は、残存軍閥や国民党左派にも手をまわし、"反蒋"の動きをあらわにする。

かねてから中国の分断支配をねらう日本軍閥は、中国の統一を、さまざまな手で妨害したが、統一政府が生まれたのをみて、軍事力による干渉にとりかかった。

関東軍を主体とする東北（満州）占領計画は、入念な準備ののち、ついに「満州事変」（一九三一年）となって爆発する。中国にたいする"宣戦布告なき宣戦"であった。

お知らせ　「蒋介石秘録」は、サンケイ新聞社出版局から単行本として出版され、すでに六巻が発売されています。（各巻八八〇円）

◇出席者略歴

かせ・としかず　外相秘書官、国連大使、ユーゴ大使を歴任。ミズーリ号の降伏文書調印に重光葵外相秘書官として参加。外務省顧問。千葉県出身、七十一歳。

6日から「満州事変」

「満州事変」（一九三一年九月十八日）が日本・関東軍の仕組んだ計画的事件であることが明らかにされたのは、戦後になってからである。

奉天（瀋陽）市外、柳条溝で満鉄の線路を爆破したのをきっかけに、関東軍は一斉に満州（東北）の主要都市を占領した。日本の政府は、いちおうは事態の拡大を防ごうとする。しかし、現地軍部の"独走"に、すでに歯止めのかけようもなかった。戦火は上海へ飛び火し、ついで「満州国」建国、熱河占領、長城戦、華北侵入と、軍の野望は

…を迎え、舞台はいよいよ「満州事変」に移る。満州の広野にお…ら第二次世界大戦へと拡大、日中両民族の間には、決定的に不幸…、中国問題の専門家に「蔣介石秘録」を通して、これまでの歴史…題や、反省点を話し合ってもらった。

(文中敬称略)

ませたい

武力背に日本外交

禍根残した対華二十一ヵ条要求

強く反省させられるわけです。

むろん先方(中国)にも行きすぎはあったと思うが、しかし、日本がはっきりと見誤っていたのは、長い歴史の中で中国の民族意識が非常にぼっ興してきていたことにたいする見落としというか、日本の政治をしておった人たちが旧態依然たる軍閥などに目を奪われて、あるときはそういう勢力に便乗し、あるときは反対し、当時の日本の国益なるものを伸長しようとはかった。しかし、それはほんとうの国益ではなかったわけです。

現在のわれわれの感覚からみると、どうもアジアの歴史において、日本の果たした役割は逆行しておったわけですね。

中嶋 私は世代的には蔣秘録の舞台になっている事件が展開されているころは、まだ生まれていなかったので(笑い)、中国のことをやっている私としては、非常に勉強になるんですが、現在の日本の若い人は、まさに毛沢東の時代だけをみて中国を考えている人たちが多いわけです。そういう意味では、私は蔣秘録を若者にぜひ読んでもらいたいという気がするんです。この半世紀ぐらいの間は、われわれの同時代史であるはずですが、そういう同時代史というものの恐るべき断絶というものに、しばしば当面しているわれわれ、とくに大学の教壇などに立ってみると、そのことを痛感するわけです。

日本国内には、いわば善玉、悪玉的な見方が非常に強かったんで、蔣介石というと、オール オア ナッシングで否定することしか知らなかったということが、とくに若い世代に多かったわけですね。アジア、中国のナショナリズムの大きな流れの中で、総体的に蔣介石を位置づけるべきだという気がします。

明治憲法誤る

――満州事変以降、本格的に日本自体のことが多くなってくると思いますが、これまでの舞台の中でも、明治以降の歩みのなかで日中間にいくつかの問題や事件が起きています。そのへんを専門家の目で、ご覧になってのお話を。

石川 これまでの連載のなかで、動きとして非常に興味があるのは、辛亥革命にたいする日本外交の対応ですね。それから日本と袁世凱の関係、対華二十一カ条要求でしょう。袁世凱の帝制運動にたいする日本外交は、パワーポリティックス(力の政策)そのもののような感じがする。もう一つは段祺瑞との西原借款であり、さらにもっとあとになるが幣原外交も興味ある問題ですね。

加瀬 日本は清国と戦い、ロシアと戦って勝って、それから大陸発展に着手するんですが、対華二十一カ条問題やシベリア出兵のように、ほんとに無謀な武力政策をしているけれども、日本だけが悪いというのではなく、日本がおかれた国際環境も考えて判断しなければいけないわけですね。

しかし、私は蔣秘録を読みながら感じたのは、そういう二十一カ条とか、シベリア出兵とか、それにつづく満州事変から日中戦争、太平洋戦争とつながっていく過程をみると、結局、明治憲法の運用をまちがっておったと思うんです。あの憲法をつくった人は、ああいう事態が起こることを想定してつくったのではもちろんない。むしろ起こるまいと思ってつくっている。たとえば天皇の地位を考えても、天皇は内心おもしろくないと思われても、それを言葉に出してはいえないというような慣習法的な憲法運用があったんですね。

だから憲法というものは、どんないいものがあっても、どのような欠点があっても、運用する指導者によって生きもするし、死にもするわけです。明治憲法が破たんしたのは、明治維新のころからしばらくの間、集団指導を中心にしていたころはともかく、その後、日本が大国になって戦勝に酔い、大陸発展をした。つまり膨張政策になった。それを悪いということを知っている人も、なおかつ、それを止めることができなかった。結果的には軍部の暴走になった。軍部だけが悪いというんじゃなく、国民に力がないというか、指導者に力量がなかったということです。

法眼 晋作氏

合理主義退く

法眼 日本だけがパワーポリティックスではなく、当時の列強がみなそうであったと思うんです。しかし、日本のやり方は後発のパワーポリティックスで、だんだん時代が変わってきているんだけれども、後発であるがゆえに、より形がどぎつく出ているということではないかと思う。

二十一カ条の問題についても、日本の中でたいへん批判する勢力があったということを申したい。原敬(元首相)ですが、原敬という人はたいへん合理的な外交面を持った人で、反対していた。あれを実行した人は日置(益)駐華公使ですが、この人は書いたものからみると、たいへん強硬な人ですね。列強もたしかに悪いことをやっているが、日本は追いつくことに急ぎすぎて、そのことが禍根を残していると思う。

人を比較するのはどうかと思うが、幣原(喜重郎=元外相、首相)は、まったく冷徹な合理主義外交であって、たとえば日本と中国との経済関係の強化を考え、中国でほうはいとして起こってくるナショナリズムにたいしても非常に寛容であり、深い理解を持っておった。そういう意味で、日本の権益を守るということでは実に強固だったですね。そういう合理主義外交は排斥されて"軟弱外交"ということでだんだんやられていく。そこへ田中(義一)首相兼外相が出てくる。

"終生の恨事"

加瀬 対華二十一カ条要求のときの日置という人は北京に行く前に七、八年、チリにいた人なんです。最初はみんなビックリした。いちばんビックリしたのは中国で、なにか小物をよこしたなという印象を持ったんですね。ナンバー2が小幡酉吉(当時一等書記官)という、のちに貴族院議員になり、枢密顧問官になった人です。この人が日置の下にいて、二十一カ条の交渉も二人がやったわけです。この小幡はのちにドイツ大使になるが、私はドイツにいて、小幡と一年半ぐらいいっしょで、よくその当時の話を聞いたもんです。

彼がしょっちゅう言っていたことは、日本が中国に最後通牒を出したのはまちがいだというんです。彼は日置と非常に争ったんですね、「出しちゃいかん」と。

あのときは、第一号から第五号まで総計二十一カ条を要求したが、四号まではたいしたことはない。最後の第五号が、中国は日本の顧問を招くとか、軍事、政治、経済について、あるいは華中の鉄道に関する利権とか、そういうことがあるんですね。これは列国にたいする遠慮もあって、ひそかに伏せておいた。その第五号がいちばん問題になって最後通牒を出すわけです。ところが出す前に、五号のなかで日本がぜひほしいと思うものは、中国側がすでに譲歩して承諾していたと、小幡はいうんです。日本に有利な状況になっているのに最後通牒を出すのはおかしい。将来中国とは友好関係を持たなければいけないし、いやしくも独立国にたいして最後通牒を出すことはいけないことだと、彼は口をきわめて論争したんですね。

だが、日置の立場は、御前会議で決定しているものを出先の一公使が変えるわけにはいかん。小幡は、いや、にぎりつぶせ、本省からしかられたら腹を切れ―というわけです。しかし結局は"廟議"に反対することはできんということで最後通牒を出したんだそうです。小幡は、私によく終生の恨事だといってましたよ。秘録では中国側の譲歩が先にあったということは出ていませんでしたが、これは後々で確認されているんです。

しかし、この話は小幡に見識があって、日置が大物でなかったという解釈も成り立つけれども、ところが国内の政治と外交というものは分離できないんですよ。国内の主導権をだれがにぎっているか、そういう点に日本の破たんのいちばん大きな原因があったでしょう。

(左上へつづく)

6日から「満州事変」を連載

「満州事変」(一九三一年九月十八日)が日本・関東軍の仕組んだ計画的事件であることが明らかにされたのは、戦後になってからである。

奉天(瀋陽)市外、柳条湖で満鉄の線路を爆破したのをきっかけに、関東軍は一斉に満州(東北)の主要都市を占領した。日本の政府は、いちおうは事態の拡大を防ごうとする。しかし、現地軍部の"独走"に、すでに歯止めのかけようもなかった。戦火は上海へ飛び火し、ついで「満州国」建国、熱河占領、長城戦、華北侵入と、軍の野望は際限もなくひろがる。

日本国内でも、政治は転換期にあった。浜口雄幸首相の暗殺未遂、三月事件、十月事件、血盟団事件、五・一五事件(犬養毅首相暗殺)と、主戦派の過激な動きが繰り返され、日本の政治は軍国主義一色に塗りかえられていく。

「満州事変」「満州国」建国は、国際連盟でも重大な国際侵犯事件として取り上げられた。しかし日本は国際連盟の勧告に服さず、連盟脱退の道を選ぶ。東洋に覇権を求める日本軍部は、こうして国際的にも孤立した。盧溝橋事件から真珠湾、そして敗戦にいたる過程が、はじまったのである。

「満州事変」当時、国民政府主席であった蔣介石は、国内の安定統一を第一義として対日抗戦を避け、外交手段による解決をはかろうとした。しかし、国内世論は、日本への宣戦を求めて激高する一方であった。共産党勢力もまた、国民政府の内部分裂をもくろみ、"反蔣・抗日"をあおった。

六日付からはじまる「蔣介石秘録」は、日中関係の転回点となった「満州事変」をテーマとして、内憂と外患を一身に負って苦悩する蔣介石の回顧を中心に展開する。

秘録」を語る

座談会

「蔣介石秘録」を語る(左から)加瀬、石川、法眼、中嶋の各氏

出席者 (発言順)

外交評論家 加瀬 俊一氏
慶応義塾大学教授 石川 忠雄氏
国際協力事業団総裁 法眼 晋作氏
東京外国語大学助教授 中嶋 嶺雄氏
司会・東京本社編集局長 青木 彰

石川 忠雄氏

ものはある意味でほしかったこともあったんですけれども。そのあと、日本は寺内(正毅)内閣ですが、膨大な西原借款をやってますね。日本は段祺瑞を援助することによって、段祺瑞の主戦論というか武力統一論で中国を統一させたいというようなことがあったと思うんです。

しかし、ちょっとあの当時の状況をわれわれが見ると、結果論になりますが、とても段祺瑞の主戦論では統一できるという状況にはなかったんですね。それにあれだけ膨大な、一億四、五千万だったと思いますが、借款をやった寺内内閣の意図というか、判断というのは、現実主義的な判断じゃないような気がするんですがね。

法眼 よく知りませんが、もし私が想像するように外務省の事務当局を無視してやられたということがあれば、非常に具体的に毎日毎日を見て政策を決めておるものにたいして、外で考え出したことというのは、つねに危険がともなう。

石川 西原借款の場合は、実外外務省を飛び越えているんじゃないかと思うんです。

加瀬 西原借款というと、われわれは伏魔殿的な印象を持っていますからね。おそらく現地でなにか話があって、いわゆる政府の首脳と直結して話が闇に入ってやったものでしょうね。

中国は一なり

――蔣介石個人は日本に好意を持っていたようで、日本を第二の故郷とまでいっていますが、日中関係のなかでの蔣介石を、どのように見ていらっしゃいますか。

加瀬 カイロ会談(一九四三年)のとき、ルーズベルトは天皇制はいらないと思っていたんですね。それを蔣介石が主張したので、日本の国民に決めさせようじゃないかということになったでしょう。私どもが非常に苦労した問題ですね。もう一つ、日本が降伏するときに例の"怨みに報いるに徳をもってする"―。クリスチャンだということは知っていましたけれども、あれだけむごい戦争をして、中国側からいえば大きな被害を受けたわけですが、それを毅然としてああいうことがいえるということは、やっぱり指導者ですね。なかなかいえないもんだろうと思いますよ。彼の立場では。

中国を知らぬ米国

「以徳報怨」やはり偉大だった

法眼 たしかにえらい人だと思いますね。そのえらさゆえに日本はまた困ったんですよ。私の扱った問題に関係して蔣介石がえらいと思うことは、中国は一つなり、と最後まで主張されたことですよ。えらかったと思います。これは北京政府も認めているわけです、周恩来も。蔣介石が、オレはこの島(台湾)だけでいいと(六〇)年代にいっていたとすれば、二つの中国ができてますわね。偉大だが、しかしながら日本を含めてほかの国を非常に当惑させたということですよ。

中嶋 日中関係史のなかでの蔣介石イメージということで考えてみると、日本で蔣介石がいいイメージで一般に伝えられた時期はほとんどないんじゃないですか。もちろん蔣介石の功績を高く評価する意見はかならずあるわけですが、ずっと歴史をさかのぼってみると、日本にとってはむしろ張作霖であり、汪兆銘であり、そして第二次大戦後は毛沢東になっちゃうわけですよね。

中嶋 嶺雄氏

私なんか、こどものころから"鬼畜米英"で、ルーズベルトやチャーチルなんかといっしょに蔣介石の顔を踏みつけさせられたもんですが、そういうことからすると、まさに日本というものを、蔣介石個人としては大事な国として考えていたにもかかわらず、日本人の側はつねにまったく違ったイメージで見ていたということを、もういっぺん、われわれは考えてみなければいけないんじゃないでしょうか。

石川 ある意味で蔣介石というのは悲劇の人だったと思うんです。これからとにかく国内建設をやろうというときに満州事変がはじまる。一方で日本と向かわなければならない。他方で共産党がのびてくる。この二つのことに彼は追いまくられた。このために本質的には彼の建国の課題としていた実質的なものはやりそこなってしまうという運命に遭遇するわけですね。おそらく抗日戦という問題がなかったら、共産党と国民党との関係というものも、ずいぶん違っていたにちがいないという感じを非常に強く持つわけです。

加瀬 わたしは少し極端なことをいうと、蔣介石を倒したのは日本だ、蔣介石を倒したのはアメリカだと思う。それはイギリスが第一次大戦後、力が衰えてアメリカに代わってきますね。イギリスはずいぶん悪いことをしたけれども、中国を知ってるんです。アメリカは知らないんです。それで一九〇〇年ごろから門戸開放の政策をひっさげて登場するでしょう。門戸開放というのは何かというと、あれは膨張主義なんです。アメリカ大陸を開拓者が西へ西へと進む。最後のフロンティアがなくなった。そのなくなった翌年ですからね、門戸開放をいったのは。そのころのアメリカは非常に深刻な不況にあるんです。いろんな文献を読むと、これで中国のマーケットを開拓しなければアメリカはとんでもないことになるという新聞、雑誌の記事がたくさんある。政治家もそういう演説をしている。

門戸開放政策というものは、アメリカが列強に遅れて中国の舞台に乗り出したハンディキャップをゼロにして、五分五分で太刀打ちしようということなんですけれども、はっきりいうと、これは経済帝国主義なんです。そこで日本の進出にしたがって正面衝突するわけです。多くの非は日本にあることは認めますが、アメリカがその間に介在したことが、また日中関係をたいへん悪くした。

もう一つは、マーシャルが出ていって国共合作という、あんなふざけたことをしたことですよ。これなんか、いかにアメリカが中国を理解していなかったかということです。国共合作をやらなかったら、蔣介石政権というものはあんなに早く破たんしなかったと私は思うんです。

そういう意味で、アメリカというのは"善人"です。しかし、かなり愚かな面があった。

◇出席者略歴

かせ・としかず 外相秘書官、国連大使、ユーゴ大使を歴任。ミズーリ号の降伏文書調印に重光葵外相秘書官として参加。外務省顧問。千葉県出身、七十一歳。

いしかわ・ただお 慶応義塾大学法学部長、同大学常任理事。「中国共産党史研究」で法学博士の学位を受く。東京都出身、五十三歳。

ほうげん・しんさく 外務省欧亜局長、オーストリア、インド各大使、外務事務次官を歴任。外務省顧問。和歌山県出身、六十五歳。

なかじま・みねお 東京外国語大学助教授。専門は国際関係論および現代中国学。著作に「現代中国論」など。長野県出身、三十九歳。

これまでのあらすじ

日本と中国のかかわり合いの歴史は、世界の歴史に大きな影響を与えてきた。本紙連載の「蔣介石秘録」は、蔣介石の日記、記述、中華民国政府公式文書など、初公開資料にもとづいて、日中八十年の秘史を回顧しつつ、すでに三六三回の連載を終え、いよいよ満州事変へとはいる。

蔣介石は、明治二十年(一八八七年)、浙江省奉化に生まれた。当時の中国は、ヨーロッパ列強の植民地政策のマトとされ、国民は腐敗した清廷の内政のもとに苦しんでいた。蔣介石の少年時代におきた日清、日露の戦争、義和団事件など、中国がこうむった屈辱の数々は、そのまま彼の革命への"原体験"となるものであった。

革命運動に身を投じた蔣介石は、日本に留学、陸軍第十三師団野砲兵第十九連隊(高田)で軍事を学んだ。日本への留学で彼が学んだものはきわめて多く、彼はのちに「日本は第二の故郷である」とまでいっている。●

辛亥革命(一九一一年)の報を聞いて、蔣介石は高田連隊を脱走して帰国、杭州に初陣を飾った。孫文の指導のもとに、国民革命は成功し、三民主義(民族、民権、民生)を国是とする中華民国が誕生した。しかし、真の独立を達成するためには、三つの大敵を残していた。それは、国内に割拠する軍閥、コミンテルンに指導される中国共産党、いぜんとして領土的野心を燃やす列強、とくに日本軍閥の三つである。●

中国の風土に根をおろした軍閥は、私利をはかって離合集散し、きのう味方についたかと思うと、あすは敵にまわって、国民革命を妨げようとした。武力による国内平定のために、蔣介石は、黄埔軍官学校(広州)をおこして、革命軍を養成、二度の北伐の末、一九二八年、ようやく中国の統一に成功、国民政府主席となった。

このころ、共産党も勢力を拡大していた。国民党は一度は合作をこころみるが、合作とは共産党による国民党乗っ取りの陰謀であることに気づく。蔣介石は上海クーデター(一九二七年)をもって、共産党との絶縁を宣言し、統一後も共産軍の掃討に力をそそぐ。これにたいし共産党は、残存軍閥や国民党左派にも手をまわし、"反蔣"の動きをあらわにする。

かねてから中国の分断支配をねらう日本軍閥は、中国の統一を、さまざまな手で妨害したが、統一政府が生まれたのをみて、軍事力による干渉にとりかかった。

関東軍を主体とする東北(満州)占領計画は、入念な準備ののち、ついに「満州事変」(一九三一年)となって爆発する。中国にたいする"宣戦布告なき侵略"であった。

お知らせ

「蔣介石秘録」は、サンケイ新聞出版局から単行本として出版され、すでに六巻が発売されています。(各巻八八〇円)